



COACH A Co., Ltd.



株式会社コーチ・エイ 執行役員

COACH A (Thailand) Co.,Ltd. (タイ現地法人) Managing Director

国際コーチング連盟プロフェッショナル認定コーチ

(一財)生涯学習開発財団認定マスターコーチ

望月 寛

コミュニケーションが新しい関係をつくる

私の駐在するタイ・バンコクでの同僚との一幕です。

ある金曜日の夜、同僚のAさんと私はクライアントとの会食を終え、ご相談いただいた内容を振り返り、次のアクションを決めて店を出ました。

私にとって一週間の区切りとなる金曜日の夜は、何とも言えない開放感があります。普段は街を歩かない私ですが、金曜日のそんな気分も手伝ったのか「今日は歩いて帰ってみたい？」とAさんを誘い、旅行者や居住者で賑わうバンコク中心部の雑踏の中を歩いて帰ることにしました。

陽が落ちて少し涼くなった雑踏の中を歩きながら、とくに目的もなくAさんといろいろな話をしました。Aさん自身のことやAさんの家族のこと、最近仕事をしながら感じていることなどを聞いているうちに、普段から一緒に仕事をしているAさんを、これまでより近く感じるような感覚になりました。やがて話はコーチングの話に及びました。

「Aさんがコーチとして乗り越えたいテーマってどんなこと？」

Aさんのコーチとしての成長をテーマに話し始めたものの、いつしか話の矛先は「クライアントが変化をつくりだしていくために、コーチとして何ができるのか？ どんな在り方を選ぶとよいのか？」という、Aさんと私に共通するテーマに話が移っていきました。

コーチングについては、それぞれが自分なりの考えを持ち合わせてはいるものの、そこに唯一の正解があるわけではありません。それぞれの体験の中から見つけたこと、疑問に思うことは違って当然です。相手との間に問いを置き、二人がそれぞれの考えを話し、そこからさらに考え、また話し、というやり取りを続けているうちに、もっともっと話がしたくなり、途中寄り道までして話し続け、名残惜しさを抱えつつも、家の

近くの最後の交差点でAさんと別れました。

「対話」の生まれる条件

その翌日、Aさんは前日のやり取りを振り返り、私にメールを送ってくれました。そこにはこんなことが書かれていました。

- 問いを間において意見を交わすことで、自分の中に散在した知識がつながる感覚があった。その一つは「一緒に考えるスタンス（在り方）でいる」ことの重要性。自分の在り方がモノの見方に影響する。上司は部下を若くて経験の浅い人と見るか？ 共創するパートナーとみるか？ 部下は上司を、正しい答えを持つ人と見るか？ 共に考えるパートナーとみるか？ 相手をどう見るかでお互いの関わりは変わるのではないか？
- 一緒に考える在り方を選んだ場合、出てくるアイデアはもとより、関係性そのものに変化が起きる。相談しやすくなる、本当に感じていることが自由に言えるのもその一つ。
- 関係性の変化はお互いのパフォーマンス、組織のパフォーマンスに影響する。

Aさんからのメールを読み、Aさんの中ではあの後も対話が続いていたのだと感じました。たしかに前夜のAさんとの対話は自分にとっても新鮮な体験でした。問題の解決策を探すのでもなく、相手を説得しようとするのでもなく、相手の考えられていることをもっと知りたいと感じる時間。それぞれが自分の思索を深めながらも、共通の理解を一緒につくっていく。そんな体験がそこにはありました。

量子力学の世界的権威であり哲学的思索でも名高いアメリカの物理学者デイヴィッド・ボームは、その著作『ダイアローグ』の中で、人々が作り出す対話について以下のように述べています。